

ジエームズ・ステュアートにおける近代農業の把握

——『政治經濟學原理』第一篇・第二篇を中心として¹⁾——

大野 精三 郎

- I 『原理』の方法と『原理』における問題の位置
- II 農業における先資本主義的形態と近代的形態
- III 近代的農業成立のイギリス的過程
- IV 總括

I

本稿におけるわたくしの問題は、ステュアートの經濟學上の功績とされながらも、従来ほとんど検討をうけることの少なかつた資本の成立過程²⁾、すなわち生産手段と労働力との分裂過程の觀察を、かれがいかなる理論によつて把握したかを明らかにすることにある。

そのまえに、ステュアートの龐大な『原理』において、この問題がいかなる位置を占め、いかなる方法によつてとらあつかわれているかを知つておく必要がある。

ステュアートによれば、政治經濟學の主要目的は、『あらゆる住民のために一定量の生活基金を確保することであり、その確保をあやうくするようなあらゆる事情をとりのぞくことである。いいかえれば、社會の欲望をみたすために必要なあらゆるものを準備し、そしてこの住民（かれらは自由民であると考えられる）を、かれらのいくたの利益が相互的欲望を相互にみたすように導くために、相互的關係と從屬關係を自然につくりだすような仕方であつたことである。』のちに詳わしくみるように、ステュアートが課題とした問題はまたその時代の問題でもあつた。すなわち、農業を中心とする社會から工業社會への轉化、土地から清掃された無産者に職をあたえるという時代の課題に照應するものであつた。

この課題を解くにあたつて、ステュアートは封建社會の解體・近代社會の成立から示唆をうけ、その歴史的過程をそのまゝ反映するような仕方であつた。『原理』を構成した。すなわち『原理』は、第一篇において、發端期の社會から近代社會までをあとづけ、農業と人口との諸關係をとりあつかう。第二篇において、近代社會成立の起動力であつた商業と工業をとりあつかう。そして第三篇において、商業と工業の發展にひきおこされた貨幣流通の問題をとりあつかい、第四篇において、近代社會の成立を促進した近代初期の戦争のさいに演じた信用の大きな役割から信用と銀行をとりあつかい、第五篇において租税をとりあつかつてゐる。このように『原理』は全體的としていちじるしく歴史的な方法によつて貫徹されており、われわれの問題は『原理』の全體によつて答えられなければならないように思われる。しかし、注意しなければならないことは、『原理』においては、このような歴史的な方法とならんで、演繹的な方法が驅使されていることである。かれは、個々の現象の單一の要素から出發し、それから生ずるあらゆる結果を明らかにする。

ジェイムズ・ステュアートにおける近代農業の把握

かにし、ついで新たな要素を導入し、順次に多様な現實に近づいてゆく方法をとつてゐる。たとえば第一篇における人口と農業との問題はつぎのような仕方で展開する。

人口の増殖は、第一に、生殖本能と土地が自生的に生みだす食料とによつておこなわれる。ついで人間が労働によつて、自然に働きかけ、農業を営むという要素を導入し、ついで、奴隸制度、貨幣、自由な制度をとりあつかひ、それによつて人口と農業とがいかなる變容をうけ、いかに發展するかを明らかにしている。

モンテスキュー、ヒュームの影響をうけたかれは、問題を歴史的にとりあつかつてゐるが、しかし、かれらの歴史把握を克服して、經濟を機構的に、また全構造的に把握することができたのは、このような理論によるものであるとみなければならぬであろう。すなわち、第一篇においてはこのような角度から自由な制度に比較した従来の制度を、多かれ少かれ、經濟外的な強制力によつて支配されている制度とみている。『古代世界においては、人々をして自身が必要をみたす以上に働かせ、國の人口の一部をして、他の部分が無償で維持するために労働させることは、奴隸によつてのみ可能であつた。これこそ、奴隸制度が一般に採用された所以である。奴隸制度は今日では、人口の増大を妨げるものとなつてゐるが、當時においてはそれは、人口増大の必要物であつた。その理由は明瞭である。もし人間が労働することを強制されないならば、かれは、ただ自分自身のためにのみ、労働するであろう。したがつてもし、かれらの欲望が僅少であるならば、かれらの労働もまた、僅少であろう。しかるに今や國家が形成されるに至り、外敵の侵害にたいして、これを防禦するための必要が生じてくると、ここにおいて、労働しない人々にたいする食物がどうしても用意されなければならない。ところがさきに假定したように、労働者の欲望が小なのであるから、

かれらの欲望の範圍以上にかれらの労働を増加させる手段が工夫されなければならない。奴隷制度はこの目的のためにつくられたのである。……奴隷は、スパルタにおいてみられるように、かれらおよび自由人の双方を養うところの土地を耕すべく強制され、あるいは今日では自由人が営んでいるあらゆる賤役に従事し、あるいはまたギリシャ・ローマにおいてみられたように國家にとつて必要な勤務についているところの人々に各種の工業的製造品を供給するために使用されていた。そのさい人々をして食物の獲得等々のために労働させるべく用いられたものは、暴力的な方法であつた。當時人々は他人にたいして奴隷であつたがゆえに、労働することを餘儀なくされていた。⁵⁾これにたいして、自由な制度は、自由民の自發的な労働によつて相互的な經濟依存關係を形成した社會制度として特徴づけられる。すなわち、ステュアートによれば資本主義的労働の本質は一般的等價物 (general equivalent) を生産する労働たることにある。ステュアートはいう、『その讓渡 (alienation) によつて一般的等價物を創造する労働をば、わたくしは産業的労働 (industry) となづける』⁶⁾『いかえれば『交易手段によつて、あらゆる欲望を満たすにたる等價物 (equivalent) をうるためにおこなう自由人の技巧的労働を、わたくしはインダストリーとよぶ。』⁷⁾後代の經濟學たとえばスミスならばこれを利潤を生む労働といい、マルクスならばこれを剩餘價值を生む労働といつたであろう。これは利潤の發生を流通過程にもとめるステュアートの學說の時代的限界を示すものといつてよいであろう。しかしこのことは、資本主義社會の歴史的な把握をさまたげない。なぜならばこのような資本主義的労働の規定は、そのなかに當然生産物が交換價值の形態をとること、そしてそれは労働力と資本との對立を内包していることを示すものであるからである。それについて、先行の社會形態における労働の特質は、使用價值を生ずる個別労働としてあらわれる。こ

のように、ステュアートにおいては、經濟社會の區別は、交換價值であらわされる特別の社會労働と、使用價值を生ずる個別的な労働の區別としてあらわれる。

われわれはここで、さしあたりつぎのことに注意しておこう。第一に、ステュアートは奴隸制度の起源を明らかにせず、かつ奴隸の労働を奴隸主による搾取労働としてみていないことである。すなわち、かれは奴隸制度の起源を、個人の政治的優越に歸し、奴隸の餘剰生産物の收取を可能にするものを土地の性質にもとめている。第二に、封建制度を独自の經濟制度としてとりださず、それを單一な奴隸制度の、莊園 (baron) による分裂とみていることである⁸⁾。第三に、資本主義制度における資本の成立を明らかにせず、單に自由な労働の成立のみを明らかにしているにとどまることである。

かくして、われわれの問題は、ステュアートによつてこのように規定されたレイヴァーとして經濟社會から、近代社會がいかに成立し、それがどのような點で、近代社會と異なるかを、農業部面において明らかにすることにある。いかえれば、ステュアートがそれらの問題をいかなる理論によつて究明しているか、また歴史的プロセスのいかなる理論的な抽象であるかを明らかにすることにある。

(一) 詳わしくは、一七六七年に刊行された『政治經濟學の諸原理の研究、自由國家における國內政策の科學に關する一試論として、とくに人口、農業、商業、工業、貨幣、鑄貨、利子、流通、銀行、爲替、公信用および租税の考察』An inquiry into the principles of political economy: being an essay on the science of domestic policy in free nations, in which are particularly considered, population, agriculture, trade, industry, money, coin, interest, circulation, banks, exchange, public credit, and taxes. London, 1767. の書物は、第二版が一七七〇年であるが、一七七六年、アダム・スミス

の『諸國民の富』がであるにおよんで、抹殺され、不遇な運命にあつた。『原理』は著者自身の書き込みによつて訂正・増補され、かれの死後、むしろのサー・ジェイムズ・ステュアート將軍の編集・刊行した『ジェイムズ・ステュアート著作集』全六巻、The works political, metaphysical, and chronological of the late Sir James Stewart, coll. by General Sir James Stewart, his son, from his father's collected copies. London 1805. 6. vols. のなかにも収録されてゐる。わたぐしは、初版本をテキストとして用ひ、Principles と略記して引用するが、『著作集』を Works と略記し、併記することとした。當面の問題にとつて、『原理』のほかは、『著作集』第五巻におさめられた『スコットランドのラマー郡の利害についての諸考察』(それらは(多くの點におつて)シレー・プリナン全體のそれに適用された)『(Considerations on the interest of the country of Lamark in Scotland; which in several respects may be applied to that of Great Britain in general.)』と題する論文が直接の素材となる。これは、スコットランドの一地方の農・工業の状態を論じたものであるが、副題の示すようにグレート・ブリタンにも擴大されうるものであつて、『原理』の理論が壓縮された形において述べられているものとして、ステュアートの理論を知るために重要である。

- (2) この點を明確に指摘したのはカール・マルクスである。Karl Marx: Theorien über den Mehrwert herausgegeben von Karl Kautzky 1 Bde 5 aufl. 1923. S. 33. 一般的にステュアートの歴史主義を賞揚するものとして、Gustav Schmoller: Grundriss der allgemeine Volkswirtschaftslehre. Leipzig 1908. なども、その例 Hasbach, Feilbogen などの論文があるが、Feilbogen の『(一八九二年)は、その例外をなすであらう。』
 『經濟理論』(一九五二年)は、その例外をなすであらう。』
 (3) Principles, vol. 1, pp. 2—3. Works, vol. 1, p. 3.
 (4) ステュアートは『この種の歴史的なつがかり (historical clue)』によつて、わたぐしは、この廣大な迷路の大道を歩

シ・ジェイムズ・ステュアートにおける近代農業の把握

- (5) Principles, vol. 1, p. 38. Works, vol. 1, pp. 50—51.
- (6) Principles, vol. 1, p. 166. Works, vol. 1, p. 223.
- (7) Principles, vol. 1, p. 166. Works, vol. 1, 223.
- (8) 封建制度についてのステュアートの歴史的规定は、つぎのように貧弱である。『ローマ』帝國の全き崩壊によつて、ヨーロッパは野蠻な諸國民によつて——かれらはほとんど産業をもたなかつたが、かれらの力は全人民の軍務によつて、維持されていた——じゅうりんされた。
- 封建的諸王國をきづいた首長のもとに、それらの王國が確立されたのちに、莊園、または主要家臣が生まれ、かれらは、かれらの上長をまねて小規模な首都——それらはしだいに獨立的となつたが——を建設した。』(Principles, vol. II, p. 352. Works, Vol. IV, p. 6.) また農奴については『わたくしは、封建政府のもとにおける大きい隷屬の起源を下層階級が、その生存のために從屬を求めたことにあると解する。かれらはその隷屬の代價として土地生産物を消費したのであつて、その生産のための勤勞の報酬として、これを消費したのではなく。』(Principles, vol. I, p. 240. Works, vol. I, p. 319.) とする。

II

經濟社會の歴史的性格を基本的な生産關係のちがひとして、すなわち産業勞働 (industry) と強制的勞働 (labour) とに區別したステュアートにおいて、その區別が農業においていかに具體的にあらわれているか。いいかえればインダストリーとレイヴァーの區別は農業においていかなる特徴をもつていられるであろうか。

われわれはあとでインダストリーとしての農業、すなわち近代の農業の成立過程をあとづけるための必要から、ステュアートがヨーロッパの封建的農業の模寫と考へたスコットランドの高原地方の農業から出發することが便宜であ

ろう。

そこでは『諸君は、あらゆる農場が農業者に有用であると思われる多数の人々によつて所有されている小屋によつてかこまれているのを、みいだすであろう。これらの人々はスコットランドではコッター（cotter）とよばれている。というのは、かれらが小屋に住んでいたからである。……スコットランドの農業者は、廣大な土地にひろがつてゐる乏しい生産物をつめる手をもたなければならぬ。かれは一定のコッターをもつていたと、わたくしは思う。……農業のこの方法によつて、改良することのできないほどの廣大な土地をもつ地主は、全土地をきわめて小数の農場にまとめることができ、そして同時に、あらゆる土地の自然的産物が集められ、消費されているのである。』¹⁾このようなコッターおよびその家族の労働によつてスコットランドの農業が經營されていたのである。『コッターの子供たちは、すべて農業者の意のままになるようになっており、かれらはみずから好む數十頭の羊を、これらの子供たちの便宜がなければ、まったく失われたと思われ土地で飼育するために、なんらの經費もかけずに半マイル、またはそれ以上はなれたところに送つてゐる。』²⁾

このような農業經營の下にあつては、住民の大部分は、自然的産物の讓渡（alienation）をおこなわず土地によつて直接養われている。これに反して、近代的農業は全面的に貨幣經濟の一環として交換經濟のなかに組み入れられている。この視角からすれば、レイヴァーとインダストリーの農業における區別は、第一に、『生活手段としての農業』（agriculture as subsistence）と『商業としての農業』（agriculture as trade）の區別としてあらわれる。前者、すなわち『生活の手段としての農業』は、生産者である農民およびその家族の生活資料の獲得のための農業であり、後

者は近代社會の經濟的相互依存關係のなかに組み入れられた農業である。後者は『勞働の當事者のために、生活手段を生産する方法にとどまるのではなく、その國のフリー・ハンドの生存のために、また仕事それ自らなり、あるいは、その生産物なりの形における等價物のために餘剰を提供するのである。』³⁾これに反して前者は、『商業ではない。なぜなら、それは生産物を賣却する意圖をもたず、單に、生存のための手段にすぎないからである。〔この種の農業においては〕……各人はみずからを養うのに精一杯であり、欲望は消滅するであろうし、生活は實に最低限まで單純化せられる。しかも社會のつながり、相互の關係は失われるであろう。』⁴⁾ここでは『土地の生産物は、……農民および耕作に従事してその家族によつて消費されており、他人のための維持にここで生産された餘剰はなにひとつない。』⁵⁾嚴密に言えば、レイヴァーとして營まれる農業において、農民はその餘剰を地代として土地所有者に納付するのであるから、このような農業が餘剰を生まないということは正しくないが、ステュアートの力點は、貨幣經濟と自給經濟の區別の強調におかれていたのであつて、その背後に兩形態の生産力の相違がふくまれているとみるべきであらう。

このように『生活の手段』としての農業は、なんらの餘剰を生まないために、また、あとでみるように、その生む餘剰が小さいために、それが資本主義社會にもちこされて存続するばあいには、農業の悪用 (abuse) として、またそのような農業によつて養われる人口の増殖は、人口の悪用として批判される。ドイツ、フランスにみいだされる多くの零細自作農がその例である。『かれは、自分自身にたいして、有用であるにすぎない。……したがつて、かれの職業がなくなつても……〔その農民が〕土地もろとも地震にのみこまれても、國家は失うところがないであらう。食物と消費者とは、なにびとにも、なんら損害をおよぼすことなく、まったく消えてしまふであらう。したがつてこの

ような種類の農業は、國家になんら利益でない。したがつて、また、このような土地所有の分布にふくまれる人口増加はなんら利益ではない。かくて農業の過度の擴張と土地の分割は悪用となり、したがつて過度の人口となる。⁶⁾

貨幣經濟と自給經濟の區別を通して、その背後に生産力の相違をふくむ『生活手段としての農業』と『商業としての農業』を區別する第二の標識は、『絶対的な農業』(absolute agriculture)と『相対的な農業』(relative agriculture)の區別である。

農業の生産物は『生産物量のみによつて測定されるはず、その生産物量を生産する労働によつて測定されなければならぬ。』⁷⁾そして、用いられた労働と相対的に考へて最大量を生産する農業を『相対的な農業』とよぶならば、近代の農業は、まさにこのような、『相対的な農業』としてあらわれる。『商業とマニユファクチュアにおける勤勞の自然的・かつ必然的結果は、相対的な農業の増加を促進することである。』⁸⁾なぜならば、『土地が改良されたあかつきには、農業の專業化が工業の必然的付隨物である。というのは、經費の減少が市場における選好を得る唯一の方法であるからである。』⁹⁾この視點にたてば、レイヴァーとして營まれる農業は、農民およびその家族が一定面積からの最大の生活資料を獲得するための『絶対的農業』として、その結果、土地にたいして過多の人口の疎放労働としてあらわれる。そしてこのことは、つぎのことと一緒に詳細に論ぜられる。

インダストリーとしての農業とレイヴァーとしての農業の區別の第三の標識は、單位面積當りの地代が、前者においていちじるしく高いことである。ステュアートの引用するスコットランドにおいて、『これらの土地地代は、その廣さにくらべれば、まつたくたいしたことではないが、しかし一農業者の保有する人員數についていえば、おそらく

ジェイムズ・ステュアートにおける近代農業の把握

ひとはスコットランドの高地における一片の土地が、もつとも豊饒な諸地方における同價値の土地よりも十倍も多くの人々を養うということも發見するであろう。¹⁰⁾『ヨーロッパの土地地代がきわめて低かつたときには、住民の大多數が農業で働いていたように思われる。もつとも實際には、かれらは農業生産物の怠惰な消費者 (idle consumer) 以外のなものでもなかつたが。¹¹⁾』

ステュアートにおいては地代は、農民の消費を超える剰餘と考えられ、そしてそれは、農業に従事しない土地所有者、製造工業者《勤勉な貧民 industrious poor》などのいわゆる《フリー・ハンズ free hands》を養う基金と考えられている。ステュアートにおいては、地代をこのような剰餘生産物の一般的な形態とみているのであつて、そこでは、第一に、農業人口が、まだ國民のはるかに壓倒的な部分を示すような、またそこでは、第二に、土地所有者が、まだ土地所有者の獨占到媒介されて、直接的な生産者の超過労働を一番に取得するような、つまり、そこでは、土地所有がまだ生産の主要條件として現象するような、そうした一状態から出發する。そしてそのような地代の騰貴をもつて、農業がフリー・ハンズを養うる力の増大とみるのである。¹²⁾すなわち『土地地代の騰貴は、それが、勤勉な人、すなわち生活資料を購入する人々によつて消費される生活資料の基金を吸収するから、勤勞の増加を示す。¹³⁾ステュアートは、ペッティ (Petty) ダヴィナント (Davenant) のイギリスの農産物生産高・人口の推算から、イギリスの農業に關係する人口を三五六萬、フリー・ハンズの數を百九十萬と推計している。この點に關連していえばステュアートは、イングランドに特有な耕地の牧場化を計るエンクロージ ョアが農村人口の減少と地代の騰貴を示すことから、歓迎していることが注意されなければならない。かれの推算によれば、穀物を生産する土地の地代は、全生産

物にたいして2・9であるが牧場のそれは7・12である。そしてこの相違は、耕作に必要な労働人口が牧畜に必要なそれよりはるかに多く、したがって、それだけ消費するところが多いという事情にもとづいている。農業およびそれに関連した工業に使わる人口は總生産物の地代にたいし逆の關係にたつわけである。かくて、農業とフリー・ハンズのあいだの比率についてのみいえば、牧場は耕地よりも一層多くフリー・ハンズを養うるのである。そしてそこに、ステュアートのつぎの命題が成立する。『國內に耕地が多ければ多いほど、その人口は多く、國家にたいするあらゆる奉仕をおこなうためのフリー・ハンズの比率は少い。國內に牧場が多ければ多いほど、その人口は少く、しかし、フリー・ハンズの比率は大きい。』¹⁴⁾かくして、低い地代と過多な農村人口、高地代と農村人口の減少とが併存することになる。このように『商業としての農業』が、地代の騰貴を示すのは、疎放的労働から集約労働への轉化をふくんでいる。商業としての農業の成立の結果『小規模農業から多數の働き手がひきだされ、他方において、農民たちは一層過激に労働することを餘儀なくされるに至つた。そして小面積の土地のうえに過激な労働が用いられることによつて、大面積の土地に輕微な労働が用いられると同じ効果があげられたのであつた。』¹⁵⁾

かくて近代農業の全歸結は地代の騰貴、農村人口の減少である。『地代の騰貴は、——とステュアートはいう——村落における餘計な人たちを、より大きな便宜で工業を営むことができるように、小都市その他に集めるために、住民数の増加か、あるいは土地人口の減少のそのいずれをも示すであろう。』¹⁶⁾

『生活の手段としての農業』と『商業としての農業』の區別は、資本主義的労働が、連続性と強度をます結果、この労働を、奴隸、封建的農民の労働にくらべて、一層生産的にし、高い賃銀を生むものとしてあらわれる。

奴隸にあつては労働報酬の最低額は、かれの労働とは獨立した不變の大きさにおいて、また種類においても分量においても固定した現物形態においてあらわれる。『貧乏な奴隸は、かれの主人から生活資料以上のものを求めることができない¹⁷⁾』したがつて『つねに生活資料しかえていない貧乏な奴隸は、價格の高低にかかわらず、同じ飼料しかあたえられていない哀れな耕作馬と同じ状況にある¹⁸⁾』これにたいして、自由労働者にあつては、かれの労働能力の價值およびそれに対応する平均労働賃銀は、かかる確定した・かれ自身の労働とは關係なき・單にかれの生理的な欲望のみによつて規定された限界のなかには表現されていない。このばあい階級にたいする平均は多かれ少かれ不變であるが、しかし個々の労働者にとつては、それは、かかる直接的な實存性において存在しない。自由労働者の賃銀は、この最低額よりもあるいは大であり、あるいは小でありうる。ここにおいて個々の労働者にとつては特殊なエネルギーや才能によつてより高き労働部面に飛躍する可能性が残されている。かつまた自由労働者は賃銀をば、貨幣、すなわち交換價値の形態においてうけとる。かれはそれを生活資料に不斷に解消しなければならぬといへ、表象に浮べられたところでは、抽象的な富が、交換價値が、かれにとつて労働の目的となり、結果ともなつてゐる。かれはそれを任意の使用價値にかえる。貨幣をもつて任意の商品を買う。かれは主人を必要とする奴隸とはことなり、自身自身を支配することを學ぶ。このように自由労働者の地位は奴隸のそれと異なる。ステュアートはそれをつぎのように表現する。『今日では、人々は自分自身の欲望の奴隸であるがゆえに、労働することを餘儀なくされてゐる¹⁹⁾』また自由労働者の『働かうとする動機は、勤勞の報酬から、商業という手段でかれの必要とするものを買い、それからいくらか残る等價物を自分自身で獲得するためでなければならない²⁰⁾』と。そして貨幣賃銀は『しばしば、労働者の第二次

的種類の奢侈を生む。』かくしてインダストリーは、人間の欲望と欲求を刺げきする。

- (1) (2) Principles, vol. I, p. 103. Works, vol. I, p. 136.
- (3) (4) Principles, vol. I, pp. 156—157. Works, vol. I, p. 210.
- (5) Principles, vol. I, p. 87. Works, vol. I, p. 114.
- (6) Principles, vol. I, p. 88. Works, vol. I, p. 116.

このような観點はまた、近代的農業の成立を歓迎せるアーサー・ヤングの立場でもあつた。『一州全體の土地が、古代ローマ風に獨立した農民たちによつて〔分割〕されてゐるならば、いかによく耕作されようとも、その一州全體は、近代的一王國にとり、なんの役にたとうか。人間を繁殖させるといふ唯一つの方法——これは、それ自體としてはまじたくなんの目的もない——以外には、どんな目的をもとうか。』と。Arthur Young: Political Arithmetic. London. 1774. p. 47.

ロッシヤーはステュアートの農業の歴史的考察を高く評價してゐるが、商業としての農業と生活の手段としての農業の區別を、餘剰を生産する農業と然らざるものの區別として把握し、一方に、奴隸制、資本制、他方に、自作農と對立させてゐるが、それは誤りである。Wilhelm Roscher: Geschichte der National Oekonomie in Deutschland. München. 1874. S. 592.

- (7) Principles, vol. I, p. 127. Works, vol. I, p. 170.
- (8) (9) Principles, vol. I, pp. 132—133. Works, vol. I, pp. 177—188.
- (10) Principles, vol. I, p. 104. Works, vol. I, p. 137.
- (11) Principles, vol. I, p. 45. Works, vol. I, p. 58.
- (12) もつともステュアートの資本制地代を定義して、それを土地の總生産物から、(1) 農民、その家族および召使の食料、(2) 農民の家族の、製造工業品および土地を耕作する道具のための必要な經費、(3) あらゆる地方の慣習にしたがつた適當な利潤をさしひいた残りの部分と考へてゐる。(Principles, p. 42. Works, vol. I, p. 55.) しかし、かれは『適當な利潤』

ジェイムズ・ステュアートにおける近代農業の把握

一橋論叢 第二十九卷 第五號

を厳密に定義していないばかりでなく、地代を分配の結果としてではなく、生産物量として把握していることはかれの論理の歸結からも明らかである。なおこの點については、Edward Berens: Versuch einer kritischen Dogmengeschichte der Grundrente. Leipzig. 1868. S. 36. を参照せよ。

- (13) (14) Principles, vol. I. p. 45. Works, vol. I. p. 58.
- (15) Principles, vol. I. p. 105. Works, vol. I. p. 139.
- (16) Principles, vol. I. p. 153. Works, vol. I. p. 205.
- (17) (18) 『著作集』に増補された部分にみいだされる。 Works, vol. II. pp. 201—202.
- (19) Principles, vol. I. p. 40. Works, vol. I. p. 53.
- (20) Principles, vol. I. p. 483. Works, vol. II. p. 214.
- (21) Principles, vol. I. p. 459. Works, vol. II. p. 165.

III

上述したところにおいて、われわれはステュアートにしたがつてインダストリーとしての農業とレイヴァーとしての農業のそれぞれの特徴をみてきた。さて、つぎに問われるべき問題は、レイヴァーとして営まれる農業は、いかなる契機によつて、インダストリーに轉化するであろうかということではなければならない。この問題は近代社會、總じて資本主義の成立にかかわる問題であるが、われわれは、これをおもに、農業・農村における變化に著目しながら、あつづけてみよう。

まづ近代的諸革命は、一般的に、レイヴァーとして營まれる農業における過剰人口の一掃、またはその近代商工業への吸収としてあらわれる。『革命は、土地から餘剰な人々を、パージし、これらのフリー・ハンズを吸収し、工業にむかわせるように町や村落にひきこもらせるために、母なる大地を強制的にはなれることをしるしづけている¹⁾』このばあい、フジオクラートの見解にとらわれたステュアートによれば、農業における生産性の高いことが、近代的商・工業の創設を可能にし、かつ導くように思われる。『われわれは——とステュアートはいう——このゆえに、人々が自然の果實によつて、生活している國々においては、全社會が（政治的にみれば）フリー・ハンズの形成するところであると論斷することができよう。そこでは、自然がファーマーの全階級を代理しているのである。

われわれはさきに工業と製造工業とが國家におけるフリー・ハンズの職業であることを述べ、したがつてその比率が最大であるところにインダストリーは最大の發達を示して繁榮するであろうと述べた。さういう國々とは、住民が自然の果實によつて生活する國々のことである。しかしこのことは事實に反する²⁾。かくて、ステュアートは、土地の肥沃性から古代アテネの繁榮を説明したモンテスキューの見解から決定的にはなれる。前文につづけてステュアートはいふ『それはなぜか。そこには、これを阻止する同じ重さをもつ他の事情が存在するからである。これら人々は欲望にうとく、しかも欲望こそ、勤勞への拍車なのである。』³⁾貨幣は、このような勤勞への起動力であり、貨幣經濟の完成化こそ、『商業としての農業』の成立の地盤である。

ヒュームの影響をもつとも強くうけたステュアートは、ヒュームが散在的にふれるにすぎなかつた見解を統一し、資本主義の成立を、大土地所有者の奢侈によつて、『勤勉な貧民』の生産する工業品とのあいだの貨幣流通から説明

する。元來、土地所有者がその地代収入の範圍で生活するときは『勤勉な貧民』とのあいだに富の變動をひきおこさないから、それを越えた『奢侈 Indulgy』こそ、近代化の動機であり、そしてこのような奢侈を可能ならしめるものは、イギリスでは土地財産の讓渡が、法制的に認められたヘンリー七世(1485—1509)の治世であつた。

工業の保護・育成の結果、逐次その王權を擴張していつたヘンリー七世による國內的統一がそのはじまりであつた。すなわち、それまで莊園に割據して、自己の保有する人員の數を誇つていた諸侯が、王權に統一されてゆく過程において、これまで『用をもなく貴族の所有に屬する邸宅をみたしていた』⁴⁾封建的家臣團が解體され、『勤勉な貧民』の群れのなかに投ぜられた。そして封建的役務は一掃され、地代は貨幣形態となつた。

ついで、十六世紀には、羊毛、マニユファクチュアの飛躍的な發展から、農村から多くの人口が排出され、それとともにレイヴァーとしての農業が『商業としての農業』に轉化される。ステュアートはこれをつぎのように説明している。このばあい前節で例示したような、スコットランドの農村が出發點となつている。『わたくしは、近代化政策が勤勉な・あるいは公共心に富む一婦人を促して、ファーマーの家に、一人ないし二人の織匠(Weaver)を置かしむると考へてみることにする。コッターらはいまや紡むことをはじめた。商業のために仕事することに慣れたほかの人々と十分競争できるほどの熟練をかれらがその織匠の家で獲得するまでには、長い時間がかかるであろう。したがつてこの産業は、ながいあいだ萎縮したままでいるであろう。しかしこの企てが忍耐をもつてつづけられるならば、これらの障害も軽減させられるであろう。家畜の群れを養つて貧しい生活を営んでいた人々は、一層みいりの多い職業に轉換するであろう。〔この結果〕ファーマーたちは、人手をうることに一層の困難を感じて、それを訴へ、おそ

らく土地を放棄するであろう。地主は年々の地代を失い、このような廣い農地の小作を引きうける者はいなくなるであろう。それは分割されなければならない。そしてつぎに、合理化されなければならない。さうするとおそらく以前には全面積から産出した以上の穀物がその十分の一の面積から産出されることになる。この穀物は羊毛の對價で買われる。……かつては土地がその自生の産物をもつてすべての住民を養つたのに、いまでは一層多くの労働が土地の耕作に用いられ、それは穀物となつて收穫され、働き手にその勞苦の代償としてあたえられるからである。……しかしかれらはコッターとしては無用になるから、もとの土地をはなれて村落に集まる。⁵⁾『これらの方法によつてイングランドの羊毛マニユファクチュア、アイルランドとスコットランドとの亞麻マニユファクチュアは大いに發達したのである』⁶⁾このような羊毛・亞麻マニユファクチュアの發達の結果『土地はもつとまばらな人口によつて住まわれることになり、そして農場はしだいにもつと廣大なものになるであろう。』⁷⁾かくして近代的大規模農業が成立することになる。このようにステュアートにおいては、工業の建設によつて、必然かつ自然に、近代農業が成立することになるのである。

- (1) Principles, vol. I, p. 153. Works, vol. I, p. 205.
 (2) (3) Principles, vol. I, pp. 47—48. Works, vol. I, p. 42.
 (4) Principles, vol. I, p. 51. Works, vol. I, p. 67.
 (5) Principles, vol. I, pp. 104—105. Works, vol. I, pp. 137—138.
 (6) (7) Principles, vol. I, p. 86. Works, vol. I, p. 113.

IV

以上われわれは、ステュアートにおける近代的農業の特徴とその成立についての歴史的・理論的把握を明らかにした。政治経済学の總體系をはじめてつくりあげたかれが、近代社會の歴史的な性格を問題の出発點とし、それに固有の問題をみずからの経済学の課題となしたことは興味深い。そして、流通過程の表象にとられた重商主義経済学からみずからを解放し、経済社會の區別を労働の形態の區別として把握し、近代的労働の特徴を明らかにした點は、かれの功績とみてよいであろう。そしてその區別のうえに、農業社會から商・工社會への轉化、それにともなう農業内部の諸變化を明らかにしたことは、かれの重要な経済学的な貢献と考えられる。それにもかかわらず、かれは當時の啓蒙主義的な歴史觀を完全に克服することができず、近代化の契機は、貨幣的要因においてとらえられている。すなわち、ステュアートは自然的な永久不變の性質をもつ人間——かれはこの人間の行爲の動機を、自己愛 *self-interest* 便宜 *expediency* 義務 *duty* あるは熱情 *passion* に求めている——を、同じ法則にしたがう自然の一部として考慮し、近代社會を人間性にしたがつて建設されなければならない理想的な社會制度としてみている。そしてそのような制度はとりもなおさず、各人の自己愛の追求に適合した貨幣制度である。したがつて、これを啓蒙史觀にしたがつていえば『時代の風潮』『政治』に中心がおかれている。古代・中世の簡素な風習を破壊し、奢侈の風習を普及することが『政治』の任務となるのである。とくに金・銀を退藏した土地貴族がこれと交換に新たな奢侈品を求める嗜好こそ、近代化への道を開いたのである。ステュアートもいう。『工業の發展を求める嗜好こそ、かかる退藏貨幣を流通にも

たらしたのであつて、アメリカの發見がこれをもたらしたのではない。……それゆえアメリカの富がヨーロッパの新文明の原因であつたのではなくして、市民的自由の擴張が、あらゆる時代にわたつて人間が熱望した財寶の所有者をして、往昔もつとも富裕な人々の財産の一部をなしていた人々のサーヴィスを購入するために、その金庫を開かせたのである。このことが、すなわち商業工業の基礎である。』このような貨幣經濟化の論理こそ、ステュアートにおける近代化の論理にほかならず、この意味で、土地財産の流動化こそ、近代化の貢桿と考られている。

われわれは改めて、このような貨幣經濟への論理を、イギリスの具體的な歴史的な過程のなかでそれがいかなる事情と結びついたとき發生したかを明らかにしなければならないが、その問題は、ステュアートにおける歴史と理論との關係を明らかにする當面の課題の外に横たわっている。

(一) Principles, vol. I, p. 441. Works, vol. II, pp. 140—141.

(一九五三年二月五日)